

## 安部公房 〈失踪三部作〉 論

—— 公房の都市表象と植民地体験 ——

波 瀾  
剛

はじめに

詩、小説、ラジオ、テレビ、映画脚本、戯曲、写真など、さまざまな領域で創作活動を行ってきた安部公房は、現代日本文化を考える上でも興味深い人物だと言える。彼が一般に知られるところは、戦後のシュルレアリスム手法の短編小説、また、出世作の小説『砂の女』（一九六二年）、あるいは、七〇年代の「安部公房スタジオ」の演劇活動などであろう。しかしそのなかでも、一九六〇年代という時期は、彼の創作活動において大きな転換期とされる。なぜなら、それまでは非現実世界を描き、芸術的アヴァンギャルドを自認していた彼が、六〇年代になると、失踪という同時代的な主題とリアリズム的叙述によって、小説を発表するようになったからである。このような手法の転換期をめぐる考察は、「失踪三部作」とも呼ばれる長編小説（註1）、『砂の女』（一九六二年）『他人の顔』（一九六四年）『燃えつきた地図』（一九六七年）を中心に行われてきた。評価は、好意的なものと（註2）、否定的なものとが相半ばして存在し（註3）、その両者が以後の安部公房受容に関する方向性を形作ってきた。

ところで、作家安部公房は、手法の問題をどうとらえていたのだろうか。多岐にわたる手法の変化の中でも、とりわけなぜ彼はこの時期になって、「失踪」という現実的、あるいは同時代的とも言える題材を採用する必要があるのだろうか。多くの彼の小説で舞台とされた都市。そのなかで、主人公たちが「変形」をとげた五〇年代と、「失踪」してゆく六〇年代との違いはどこにあるのか。稿者は、この問題が安部公房の都市に対する認識と深く関わっていると考えている。そこで本稿では、六〇年代における手法の変化を探るために、まず作家の都市認識を形成したと思われる「瀋陽」での体験を確認し、そのうえで、日本の都市化に対する作家の見解、また作家に対する同時代評価などを参照しつつ、「失踪三

部作」の分析を試みたい。

# 一、小説言語、および法律用語としての「失踪」

先に述べたように、一九六〇年代に入り、安部公房に対する、批評家や読者の関心が急激に高まりを見せた。この原因の一つには、作品の完成度もさることながら、公房の描く作品の主題と都市化の問題との関わりが挙げられるだろう。つまり、この時期、都市問題は、公房一人に限らず、他の文学者、社会学者、ジャーナリズムの大きな関心事でもあった。そのため、公房の三部作の主要な舞台であった都市と、そこに一貫する主題であった「失踪」とは、読者の興味を惹きやすかったと言える。これは、都市と犯罪とを結びつける社会派推理小説の隆盛や、都市論、都市問題研究の流行とも共通する側面かも知れない。

しかし、このような状況を作家と作品の側から考えるとどうなるだろうか。六〇年代における彼の作品の特徴を考えると、まず、それまでのシュルレアリスム小説やSF小説と異なっており、作品の舞台がいわゆる現実世界に設定されていることが挙げられる。それにとまなうかたちで、それまで作品の登場人物の疎外状況を、「変形」という現象で表象していたのに対し、三部作では、「失踪」という行為によって表象するようになったことが特徴として指摘できる。これは、単に疎外状況を表象する素材が「変形」から「失踪」に移行したにすぎないとも言える。しかしそう単純化してとらえることはできない。というのは、三部作においては、主題となる「失踪」という語彙が小説言語としてだけではなく、法律用語としても機能しているといった二重性を持っていることに注目する必要があるからだ。例えば、『砂の女』の結末部にある公文書や、『燃えつきた地図』冒頭部の調査依頼書としての用い方を見ると、作家は、「失踪」という語彙が法律用語であるという前提を強く意識していたと考えられる。そしてその二重性は、作品世界の創造とともに、作品外にある読者の現実との関わりを模索した結果生じたように見える。これは、書き手の言語行為が、作中人物と読者との二つの方向に向けられている『他人の顔』という作品を間に挟んで創作されていることから看過できない問題だ。そのためまず、「失踪」を法律概念としてあらためて確認しておきたい。

法律で失踪に関する規定を設けているのは、民法の第三〇条から三二条である。以下にその一部を引用してみる。

## 第三〇条 失踪宣告

- 一、不在者ノ生死カ七年間分明ナラサルトキハ家庭裁判所ハ利害関係人ノ請求ニ因リ失踪ノ宣告ヲ為スコトヲ得
- 二、戦地ニ臨ミタル者、沈没シタル船舶中ニ在リタル者其他死亡ノ原因タルヘキ危難ニ遭遇シタル者ノ死亡カ戦争ノ止ミタル後、船舶ノ沈没シタル後又ハ其危難ノ去リタル後一年間分明ナラサルトキ亦同シ（註4）

ここには、「普通失踪」と「特別失踪（危難失踪）」という二種類の失踪がある。そして、「不在者」と「戦争俘虜」や「遭難者」の場合とに分けて、「失踪宣告」するための期間が設けてある。

そもそも「失踪宣告」とは、行方不明者を一定期間の後に死亡したものと見なし、彼らの財産や家族関係の法的処理をする規定である。こうした法律概念の起源は、ローマ法の時代に遡るのだが、日本に輸入されたのは、一八九〇年（明治二三）で、旧民法を起草するときのことだった（註5）。その後、一九六二年（昭和三七）まで、失踪の規定に修正が加えられることはなかった。だが、民法全般の改正に関する審議委員会が五四年に発足し、実際の運用面で時代にそぐわなくなった部分を優先して検討するようになった。その優先項目に「危難失踪」の問題を取りあげていた。というのも、「危難失踪」の対象となる戦争や海難に遭った者の生死の消息を知るのに、明治期に制定した三年という期間は長すぎるということになったためである。そして六二年四月に、「危難失踪」の認定期間は三年から一年に改正された（註6）。

安部公房が「失踪」という法律概念を積極的に作品に取り込んだのはこの時期になる。だとすれば、公房の三部作において、こうした失踪の概念への接近が同時代的な興味から起こっている可能性は十分考えられる。しかしこの点について詳述するまえに、なぜ法律なのかという視点に立つて、作家と法の主体である国家との関係を検証しておこうと思う。

## 二、安部公房の共同体概念——「瀋陽」における都市と国家——

安部公房と都市との関係は、戦前と戦後、言い換えれば、「満州」と「日本」という二つの国家的枠組みの中で考察する必要がある。まず、旧満州の方を見てみると、公房は、父の満州医科大学付属病院勤務にともない、一九二五年（大正一四）、旧満州の奉天（現在の瀋陽）に渡った。このとき公房は一歳。以後一九四六年（昭和二一）までの間に、東京への

進学をはさみながら、一七年ほど瀋陽で暮らした。そのころの瀋陽には、移民政策によって渡満した日本人や、満鉄関係者、現地中国人、朝鮮人、白系ロシア人等が生活していた。

この瀋陽という都市は、もともと満州族の故地であった。市街は瀋陽城を中心にして発展し、日露戦争後に、日本人がこの都市にまとまって移住し始めた。彼らの移住先は、瀋陽城内ではなく、その西側に当たる区域の「商埠地」(註7)と「満鉄附属地」(註8)だった。これら三地区は、瀋陽城周辺の中国人街と、日本人街である「満鉄附属地」との中間地域に、日本人を含めた外国人商業地区である「商埠地」があるという構造をとり、異なる性質の市街地の間にはそれぞれ明確な区別ができていた(註9)。

「満鉄附属地」の開発当初、瀋陽における日本人移住者の数は千人にすぎなかった。しかし、植民地化の進展によって増加し、「満州国」建国後の一九三四年(昭和九)には、「満鉄附属地」だけで五万人を超えた(註10)。安部公房はこの「満鉄附属地」において義務教育を受けた。「満州国」における日本人教育の研究者、野村章氏によれば、一九二〇年代には、積極的な現地主義が進められ、日本国内の「国定教科書」と、現地の「補充教科書」が併用されていた。そして、一九三七年に治外法権が撤廃されてからは、日本政府機関の監督下で、国家主導の植民地日本人教育が行われた(註11)。この時期、安部公房を含む日本人子弟は、自己形成期において、かなり重層的に「日本」を体験していたと言える。すなわち彼らは、「満州」の他民族を指導する中心的存在として教育された。しかし、そうした思考は、堀と兵力とに守られた「満鉄附属地」内の、職員を含めてそのほとんどが日本人という学校において培われていたのであって、堀の外では必ずしも機能しなかった。また彼らは、「外地」の人間として、「国定教科書」に描かれた緑あふれる祖国(内地)への憧憬を募らせていた。ところが安部公房の場合、実際に高校進学した日本では生活に適應できなかったし、さらには、瀋陽においても内地日本人の他民族に対する横暴に疑問を抱かざる得なかった(註12)。このように、安部公房が早くから現実の日本に対して距離を感じたことは容易に推測できる。

作家自身の瀋陽生活に関する言及は多くないが、敗戦期の瀋阳市街に関して幾度かなされているので、ここに参照したい。戦後、彼が日本に引き揚げてまだ二、三年の頃には、「完全な無政府で、強盗や人殺しが日中大通りでヒンピンと起き、しかも抵抗が出来ない」と述べており、瀋陽における敗戦後の混乱した状況下における様子がうかがえる(註13)。これは、作家がシュルレアリスムの小説を受容する以前、すなわちまだ文学手法を模索していた時期の発言であり、この時

期、自ら実際の戦地となった「外地」での体験について発言していること自体興味深い。だが、時が経つに連れて、同じ瀋陽における戦後の混乱にも、「無政府」と言う点に関して、認識の変化が見られる。例えば、六〇年に執筆した自筆の年譜には、「その無政府状態は、不安と恐怖の反面、ある夢を私にうえつけたことも事実である。父と、父に代表される財産や義務からの解放。階級や、人種差別の崩壊」とあり、「無政府」という状況にある種の自由さを感じているように見える（註14）。また、その後にも、

中国では、「超」というか「非」国家的というか、連帯の国家のルールからはみ出したルールがあったような気がするんだ。ぼくは終戦後、瀋陽にいたんだけど、（中略）敗戦後の無政府状態を、ムチャクチャだったという人がいますが、実際はちがったな。これは悪い政府が入ってきた時にそうなるんで、都市というものは、日常的には平和そのものなんで、店はやっているし商品は売っているし自主性というのは貫かれていたと思うんだ。（註15）

と発言している。引用中の「中国では『超』というか『非』国家的というか、連帯の国家のルールからはみ出したルールがあったような気がするんだ」という発言は、都市が国家から自律して存在していたことへの注目だと言える。

安部公房にとつての都市、そして国家の認識には、戦前の瀋陽における「満鉄附属地」のあり方が根底にある。すなわち、彼が自己形成期に依拠した〈共同体〉は、瀋陽という都市において秩序の崩壊を迎えている。また、自己同一性の喪失を補うべき、血縁的集団（民族）や、政治的集団（国家）といった理念もはやくから懐疑の対象とされ、敗戦後の混乱期にはその極に達している。そのため、戦後復興期における安部公房の思想には、「外地」の極限状態を生き残ったという実感をともなつて、「日本」を外部者の視点でとらえようとする傾向が認められる。そして、〈失踪三部作〉は「超国家の論理」という考えが顕在化する六〇年代に創作されていた。だとすれば、作品世界で描かれる「失踪」は、法律概念、そして安部公房の国家認識とどのようにかわるのか、次節で考察したい。

### 三、挿入される同時代

『砂の女』以後、三部作となった小説は、「失踪」という主題を媒介にして、外部の現実世界が、内部の現実世界に浸

透していることは既に述べた。なかでも『砂の女』の結末部が興味深い。巻末にのせられた二枚の公文書のうち、「審判」は以下のような文面になっている。

審判／申立人 仁木しの／不在者 仁木順平／昭和2年3月7日生／上記不在者年8月18日以来7年間以上生死が分らないものと認め、次のとおり審判する。／主文／不在者 仁木順平を失踪者とする。／昭和37年10月5日／家庭裁判所／家事審判官（註16）

この文書で重要なのは、「失踪者」が、法律によって定義されていること、そして、右の「審判」と「公示催告」（二一七頁）との二文書によって、失踪認定をするまでの行為の過程が提示されていることにあるだろう。この問題はさらに次の点とも関連する。つまり、引用したテキストの日時（昭和三十七年二月十八日「公示催告」、昭和37年10月5日「審判」）には、小説の発表年次（昭和三十七年六月）あるいは、「特別失踪」に関する法律の改正（昭和三十七年四月）という点で同時代性が見られる。これらの接点はどこにあるのだろうか。

「失踪宣告」に関する法律改正については、先ほども述べた。しかし、ここで先ほどよりも期間を狭めて、一九六〇年前後に焦点を絞ってみると、興味深い事実に当たるとは。それは、一九五九年五月に定められた「未帰還者に関する特別措置法」である。ここで言う「未帰還者」は、第二次世界大戦後海外から引き揚げてこなかった人々であり、その数は五八年においてもまだ三万人を超えていたという（註17）。この「未帰還者」を待つ家族は、「留守家族」として保護されていた。しかし当局が、五九年七月末に留守家族法が切れることを考慮して、彼らに遺族としての給付金を与えることにより、引揚げ問題に終止符を打とうとした。そのなかで「未帰還者」を一括して死亡者とみなす「特別措置法」が取られたという経緯が認められる（註18）。その際法的に行われるのは、特別の失踪宣告だといってもよい。このような経緯を経た後に、危難失踪の期間短縮が決定されたのである。

『砂の女』において、「失踪」は「普通失踪」としてテキストに登場している。この二つの「失踪」のずれは、公房の敗戦時の都市体験から生じてきているように思われる。というのも、先に引用した「未帰還者」の問題は、安部公房にとって他人事ではなかったからだ。このとき公房は、「失踪を認定する者」と「失踪者と認定される者」との差異に注目したのではないか。すなわち、法に守られる者の論理からすれば、失踪の認定とは、生死不明な人間を死者として回収し、

その存在を捨象するという合理的な処置である。ところが、その法律概念から逸脱した者は、死者という処置とは無縁に生存し続けている。公房は『砂の女』において、集団における同一化と他者の存在捨象の過程を、「普通失踪」として表象する。引用した公文書の写しは、小説内部に記述された主人公の行動や認識とは無関係な地点から、彼を失踪者、言い換えれば死者とする国家の論理をあらわしている。両者のこのような断絶によって、『砂の女』は、読者に対して、現実の国家が都市化状況に置かれた都市生活者を規定し得ているかという疑問を投げかけている。

また、権力の論理と失踪者の認識とのずれは、『燃えつきた地図』においては、縮小転写して挿入された新聞記事が媒介する（資料一）。この記事が挿入された理由を考えるならば、まず第一点として、一九六七年当時、家出や失踪が「フーテン」や「蒸発」という流行語とともに理解された外部の現実と共鳴する面があるだろう（註19）。そして、第二点として、小説内部において、後に自殺する田代という登場人物が、新聞の公共性という力を背景に社会的逸脱者を他者とみなし、その存在の個別性を捨象する思考の様式と結び付けられている。ただしむしろ挿入の重要性は、新聞記事に見られる「蒸発」という語が（註20）、本文には持ち込まれず、主人公の言葉とまらない点にある。すなわち第三点として、新聞記事の転写は、ジャーナリズムによって特殊化されてゆく社会的逸脱者と、実際に「失踪」してゆく人間の認識との心理的な距離を示すためにある（註21）。このように、『失踪三部作』においては、まず作品の形式に、失踪者と「共同体」の権力との対立が見られる。つまり、『失踪三部作』において、法律文書、新聞記事といったテクストは、登場人物の行動を裏づけている。なおかつ、その背景にある社会権力をも表象することによって、国家にいたる権力の構造と、現実世界の読者との関係を問う役割を果たしている。

#### 四、六〇年代批評史における『砂の女』

『失踪三部作』において、「失踪」という概念が引揚げ者と国家という観点から採用されていることは、前節までで確認できたと思う。しかし、『失踪三部作』が三部作として成立する経緯については、他の要素も考慮する必要があるだろう。この点で重要な役割を果たしたのが、同時代の批評家である。高度経済成長期と呼ばれこの時期は、中間小説、大衆小説の興隆とともに、テレビの普及が目ざましく、いわゆる純文学を取り巻く環境が変貌を遂げていた時代である。また、

一九六〇年（昭和三五）前後における日米安保闘争下にあつて、同時代の政治状況を如実に描いた文学作品が、出版社に對するテロ行為を引き起こすまでの事件となるなど、戦後の文学全体のあり方が問われる時代でもあった（註22）。そのような状況にあつて、批評する側はどう対応していたかといえば、まず、一九六一年（昭和三六）に始まった「純文学変質論争」が目につく。そこでは、平野謙氏が「純文学」のおかれた危機的状況の認識を述べたことに始まり、伊藤整、高見順、山本健吉、佐々木基一、本多秋五などが加わつて「戦後派文学」の評価を巡る議論が続いた。しかしこの論争は、みづからが戦後派に属する批評家たちで交わされた議論であつたため、新世代の批評家たちから論争自体に對する反発を受けたりもした。彼らの論争の内容に関しては、すでに先行研究において詳細な説明がなされているので（註23）、ここで繰り返すことはしないが、本稿において注目したいのは、こうした六〇年代の批評界と安部公房の作家活動との密接な関わりである。より具体的に言えば、安部公房に對する評価の高まりは、時代の変化を認める批評家たちが「戦後派文学」に對する批判をするなかで生まれてきたのである。

このことは、安部公房評価の中心となつた佐々木基一氏と奥野健男氏の批評を見るとき明らかになってくる。『砂の女』をいち早く評価した佐々木基一氏は、六二年八月『戦後文学』は幻影だつた」を發表している。この論文は、戦後派の内部批判といふべきものあり（註24）、そのセンセーショナルな題名もあつて大きな議論を呼んだ。その翌月に發表されたのが『砂の女』論（脱出と超克）である。佐々木氏が同小説を評価した理由のひとつは、花田清輝を中心として結成された「夜の会」以来、長く安部公房と活動をともにしたことにあるだろう。ただし、「脱出と超克」における評価には、氏の「戦後文学」に對する見方を見事に反映した公房作品という構図がうかがえる。このことは、以下に挙げた、戦後派に属する作家（野間宏、埴谷雄高、椎名麟三、大岡昇平、堀田善衛、武田泰淳など）に對する見解と、『砂の女』への賛辞とを比較すれば理解できよう。

① 彼らは、戦争によつて、非常時を日常時とみる亂世の眼を養われたが、非常時のなかの日常時をとらえ、あるいは日常時のなかに非常時を發見する革命の眼をもつにはいたらなかつた。『戦後文学』は幻影だつた（註25）

② 作者安部公房は、日常生活からの逃亡と脱出を夢みるロマンチズムの対象として危機をとらえるかわりに、日常生活の精髓こそほかな



らぬ危機的情況としてとらえた。その意味で、この作品は、戦後文学に一転機を画する重要な意味になった小説とわたしは考える。「脱出と超克」(註26)

引用した二つの論文において、氏は戦後派作家に日常の変革という意識が不足していると嘆く。そして、荒廃した戦後の文学は、『砂の女』という作品の登場によってその転期を迎えたとする。『砂の女』が「日常生活」に潜む「危機的情況」という展開を見せることは事実であり、「脱出と超克」論が確な説解をしているとは言えるのだが、論の合間に見られる公房賛辞は、文学による日常変革という氏の認識によって生まれた副産物である。そのため、公房のとった新たな手法を前提なしに受け入れてしまい、その問題を作家の側から追求することはなかった。

公房賛辞と「戦後文学」批判とのかかわりは奥野氏の場合についても言える。「政治と文学」理論の破産」において、氏は『砂の女』と三島由紀夫の『美しい星』(註27)が、「固定化された政治的信仰」に惑わされることなく、「素直な目で現代の状況に向い」、「日本の政治小説としては画期的」だと述べた(註28)。しかし、もし新たな政治小説の可能性が、寓意的であったり、SF的であるという意味での新鮮さにあつたなら、作品の解釈としてはやや行き過ぎた嫌いがある(註29)。

この奥野氏の見解には、公房の政治活動に対する評価、すなわち、彼が六二年二月に共産党から除名されたことへの評価も加わっている。つまり、六〇年安保闘争における挫折を味わい、政治の優位性に対する疑問を禁じ得ない状況にあつて、共産党を離れるという見識をもった安部公房だからこそ、新たな文学手法に取り組むことができたという認識、あるいは批評の戦略である。このようにして、「砂」の日常を変革しようという『砂の女』の主人公の姿は、作家の政治的な立場の変更に二重写しとなつて、戦後復興期におけるアヴァンギャルド作家安部公房のイメージを、新しく純文学作家へと変容させることになった。

## 五、戦後日本の都市化と安部公房

戦後、経済復興の中心地に置かれていた東京の場合、敗戦当時、三五〇万にまで減少した人口は、一九五五年(昭和三十

○)には八百万に達した。そして、一九六二年(昭和三七)には一千万人を超えるほどになっていた(註30)。また、東京ばかりでなく、日本全国が都市的な生活様式を享受するようになり、戦後の日本社会は確実な変化を遂げていった。それともない、文学の主題も「性」や「家」に対する価値観の変化や、疎外の問題を大きく扱うようになる(註31)。『砂の女』という小説は、このような時代の変化を先取りしたという評価をもって、批評家に迎え入れられることになったのだが、作家自身もこうした同時代評価を変えようとはしていない。むしろ、『砂の女』以降、作品の舞台は都市の内部に移動し、《失踪三部作》が現代の都市という範囲内で理解されることを期待していたようにも見える。

また作品に限らず、安部公房は多くの国で顕著となっていた急激な都市化現象に対して積極的に発言するようになっていく(註32)。それらの発言は、端的には、「人間相互の関係が、複雑化、もしくは異常化したため」、都市生活者の多くは「焦燥感」を抱いていたという意見に集約される(註33)。この点に関して、日本を例に取ったものを見てみると、

たとえば、都市化現象の一つの側面として、無名性であるとか、それから人間が他人と記号的にチームを組まなきゃいけないということなんか。(中略)そこから起こる孤独なら孤独というような問題、これを演歌に(中略)孤独感を歌っているかぎりこれはうけるのです。「ひとり淋しく……」とかなんかということになっちゃうわけです。

ところが、モラルの面からいったら、絶対に孤独を許容しないんですよ。(中略)学校教育ですらそうです。孤独というものは悪である、つねに社会的にひずんだものであるという捉え方をしちゃって、都市的にいやでも起きてくるものから目をそらすのです。(註34)

とあるように、彼は「孤独」という問題が、都市化現象の必然性だと考えていたことが分かる。しかしそれは、一般社会の「モラルの面」では絶対に受け入れられないものだった。公房からすれば、一九六〇年前後において、日本も「農村的」な関係から「都市的」な関係へ、言い換えれば、地縁、血縁の共同体における一義的で濃厚な人間関係から、機能的に結ばれる多様な人間関係へと時代が移行していった。ところが、都市化する日本を体験する人々は、個人のレベルから学校、企業に至るまで、それぞれが旧来の一義的な人間関係を欲していたのである。彼は、この傾向が保守的と呼ばれる人々に限らず、伝統的なものに抵抗していたはずの学生運動などにも見られると考えていた(註35)。

このような視点は『他人の顔』そして『燃えつきた地図』における人物像とも関わっている。例えば『他人の顔』において、主人公の「男」は、家庭、職場、群集、民族、国家などが、自己の所属すべき《共同体》であると主張する。そし

て、妻から絶縁状を突きつけらると、法の処罰によって、国家という觀念の「共同体」に所属する「痴漢」への道を選択する。また、「東京という都市に、正面から挑戦」(註36)した、『燃えつきた地図』には、ある「団地」に住む「波瑠」という女性が登場する。この女性は、主人公の私立探偵に対して、失踪した夫の行方調査を依頼する。しかし、彼女が実際に望んでいるのは、夫の捜索ではなく、私立探偵による定期的な夫不在の報告である。したがって、彼女にとって失踪した夫は、「空想と独り言であふれそうになって」いるときに現れる(二二五頁)、想像上の人物と何ら変わるところがない。つまり、彼女はずっと家庭という幻想の世界でのみ生きている人物として描かれている。

これらの人物は、複雑な人間関係を拒否し、さまざまなかたちで「共同体」への同一化を求めている。そして、彼らの妄想の究極には国家という觀念が見え隠れする。しかし、そうした志向のゆえに、家族の「失踪」を止めることもできず、「失踪」の原因を理解することもできないのである。

安部公房の都市認識と植民地体験との関わりについては既に述べたのだが、本節における考察と照らし合わせてみる時、それらの言説の新たな問題性が浮かび上がってくる。すなわち、六〇年代に至って、「無政府」や「超国家」という論理に組み込まれる時、瀋陽は「外地」としてではなく、都市の未来像、または都市の極限状態として表象されている。言い換えれば、瀋陽は恒常的な「共同体」が存在し得ない「都市」の具体例となっていたのである。このようにして、「失踪三部作」は作品を重ねるに連れて、引揚げ者と国家という作家の立場よりも、国家の時代から都市の時代へとという進歩の図式を顕著にあらわすようになった。

## 六、三部作に対する評価と作家の立場

『失踪三部作』の三作品目に当たる『燃えつきた地図』は、以下の引用のように、同時代の社会現象であった「蒸発」とあいまって、執筆段階からすでに関心を集めている。

最近、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ等でしきりに「人間蒸発」という現象が騒がれております。また、今村昌平監督は目下映画を撮っておりますし、作家の安部公房さんも小説を書いておられると聞きます。(註37)

これは、右に引用した著書が刊行される半年ほど前、安部公房自身が雑誌において述べた以下の文章を踏まえているだろう。

だからぼくは、書きたかつたのだ。なんとか、都市の言葉を見つけたし、都市の孤獨を病氣だと錯覚している、その錯覚に挑戦してみたい。いま必要なのはけつして都市からの解放などではなく、まさに都市への解放であるはずだ。自殺者や、失踪者たちは、たぶんその挑戦に敗れた先駆者だったのだろう。そこで、今度のぼくの小説には、彼等の足跡を追跡する私立探偵が選ばれたというわけである。(註38)

〈傍点著者〉

ただし、前者の引用で引き合いに出される「蒸発者」と、安部公房が描こうとした「失踪者」とは必ずしも一致していない。それはたんに作品内での扱われ方ばかりではない。例えば、『蒸発人間』においては「蒸発」する者が、うつ病であったり、異常人格者であったりするという見解が示されている(註39)。だが、これは「都市の孤獨を病氣だと」するような認識が「錯覚」であるとし、「失踪者」をその「錯覚」に対する挑戦者として正当化する安部公房とは相容れないものである。ところが、『燃えつきた地図』を含めて論じた当時の文芸時評では、「自殺、蒸発、幻想など、現代流行のモチーフは、現状よりの『脱出』という共通項をもっている(註40)と指摘されるように、安部公房の周囲は、三部作における「失踪者」の世界も、週刊誌等でスキヤンダルとして扱われる「蒸発人間」も同じ次元で捉えていた(註41)。

このような周囲の反応に対して、作家がどう対処したのかといえ、彼は三部作と植民地体験とを結びつけて、「失踪者」のあり方を自ら説明するようになっていく。その一つの例は「国家からの失踪」と題されたインタビューであり、「超国家」の発言もここでなされていた。しかし、前節でも指摘したように、そこでの植民地に関する発言は、高度成長期の都市化社会という前提に沿った内容に組み替えられている。また、別のインタビューでは、「窓のイメージ、よく出てくるでしょう。あれも満州育ちのせいですね」と言い、この窓のイメージが「非常に重要なんです」と強調したりもする。ただし聞き手はその直後、「そうだ、もう一つお聞きしようと思っています」と、話題の変更を求め、その重要性を認めていなかったし、作家もこの点に対してそれ以上口を挟んではない(註42)。

作品において引揚げ者と国家の問題を前景化しない作家の姿勢は、『砂の女』においては有利に作用したのだが、『燃

えつきた地図』では、作家の意図と離れて、「失踪者」を異常人格者とするような解釈を招いているようにも見える。このように、作家の描く「失踪者」の姿と読者の認識する「失踪者」とのずれが大きくなったことには、安部公房という作家における「外部者認識」の変容が介在している。すなわち、戦前の「満州」は「内地」の日本からすれば、「外地」と呼ばれる異質な世界であり、公房の作品世界にしばしば描かれる異邦人や、外部者の視点も、この「引揚げ者」の異質性を重要な契機としている。しかし作家が、六〇年代にいたって、国家の全体主義的傾向を、都市化社会の容認や、中国の文化大革命への批判において述べるとき、作家における国家との位置関係はわかりにくくなっていたのでなかろうか（註43）。

## むすび

戦後文学の世界にあつて、安部公房はアヴァンギャルドの旗手として考えられていた。しかし一九六〇年代には、より現実的な題材を扱い、純文学者として広く読者の支持を得ることになった。ただし作家においては、それは、異文化世界ともいべき感覚で「内地」の姿をとらえていた五〇年代と、日本がまだ都市化に抵抗している過渡期の社会としてとらえていた六〇年代との差であつたと考えてよいだろう。このように考えると、国家の外部を指向する作家の立場に大幅な変化は認められなかつたとも言える。

安部公房の創作活動における転換期において、むしろ重要だつたのは、作家と同時代の批評との関わりであつた。また、「失踪三部作」は、「戦前」と「戦後」との切り離す国家の論理を批判して出発しながらも、作家の言説における「戦前」と「戦後」の切り離しを助長するという矛盾をもつくりだした。

このように、本稿においては、安部公房の小説手法の変化に関する経緯を示すことができたと思う。ただし、その後の創作活動の際に生じた葛藤や、他の引揚げ者作家との相違、あるいは戦後のアヴァンギャルド芸術と政治との関係については言及できなかったので、今後の研究の課題としたい。

## 註

テクストに関しては、以下の版を使用した。『砂の女』新潮社、一九六二年六月。『他人の顔』講談社、一九六四年九月。『燃えつきた地図』新潮社、一九六七年九月。

(1) 管見によれば、『失踪三部作』の用語が最初に使用されたのは、田所泉氏の「故郷と作家との闘い」(『新日本文学』一九六七年十二月)である。

(2) ウィリアム・カリー著 安西徹雄訳『疎外の構図』新潮社、一九七五年等

(3) 岡庭昇『花田清輝と安部公房』第三文明社、一九八〇年等

(4) 『六法全書』2 平成八年度版、二〇七八頁

(5) 大谷美隆『失踪法論』有斐閣、一九三三年、八—四四頁参照

(6) 阿川清通『危難失踪の期間を一年に短縮』(『時の法令』法令普及会、420号、一九六二年四月)

(7) 一九〇三年、清国と日米両国との通商条約改訂の際、外国人の居住及び貿易のために開放された地域。『満鉄附属地経営沿革全史』龍溪書舎、一九七七年、六三七頁。

(8) 南満洲鉄道(株)の鉄道沿線およびそれに隣接する市街地。日本の行政権限がおよぶ。平凡社『日本史大事典』一九九三年、第六卷 三七—六七頁

(9) 越沢明『満州国の首都計画』日本経済新聞社、一九八八年、四五—六頁

(10) 満史会『満州開発四十年史補巻』満州開発四十年史刊行会、一九六五年、六四頁

(11) 野村章『満州・満州国』教育史研究序説』エムケイ出版、一九九五年、一三八頁

(12) 安部公房『死に急ぐ鯨たち』新潮社、一九八六年、七二—三頁

(13) 安部公房ほか『二十代座談会—世紀の課題について』(『綜合文化』一九四八年八月)

(14) 『自筆年譜』(『新鋭文学叢書2 安部公房』筑摩書房、一九六〇年、二七八頁)

(15) 安部公房『国家からの失踪』(『日本読書新聞』一九六七年二月二〇日)

(16) 体裁は公文書の写し。『砂の女』二一八頁

(17) 山王政幸『戦時死亡宣告について』(『時の法令』法令普及会、316号、一九五九年五月)

(18) 高野竹三郎『未帰還者の死亡推定』(『時の法令』法令普及会、264号、一九五七年二月)

- (19) 潮文社編『蒸発人間』潮文社、一九六七年、九頁
- (20) 朝日新聞「一九六七年七月一日朝刊社会面」
- (21) 拙稿「安部公房『燃えつきた地図』論」、『文学研究論集』一四号、筑波大学比較・理論文学会、一九九七年三月
- (22) 西川長夫『日本の戦後小説』岩波書店、一九八八年) 三二—三七頁等参照
- (23) 鈴木貞美『日本の「文学」を考える』(角川書店、一九九四年) 等参照
- (24) 松原新一、磯田光一、秋山駿『増補改訂戦後日本文学史・年表』(講談社、一九七九年、三〇八頁)
- (25) 佐々木基一『戦後文学』は幻影だった(『群像』一九六二年八月)
- (26) 佐々木基一『脱出と超克』(『新日本文学』一九六二年九月)
- (27) 三島由紀夫『美しい星』(『新潮』一九六二年十一月)
- (28) 奥野健男『政治と文学』理論の破産(『文藝』一九六三年六月、二一八頁)
- (29) 武井昭夫『戦後文学批判の視点』(『文藝』一九六三年九月) 等参照
- (30) 東京百年史編集委員会編『東京百年史 第六卷』ぎょうせい、一九七二年、一〇三—一四頁
- (31) 前掲『増補改訂 戦後日本文学史・年表』、三六八頁
- (32) 安部公房『都市について』(『新潮』一九六七年一月) 等
- (33) 安部公房『モスクワとニューヨーク』(『東京新聞』一九六四年二月二六、七日)
- (34) 色川大吉ほか『歴史の視点』下 日本放送出版協会 一九七五年、三六一—二頁
- (35) 同書、三五五頁
- (36) 安部、前掲、『モスクワとニューヨーク』
- (37) 前掲、『蒸発人間』、九頁
- (38) 安部、前掲、『都市について』、一七三頁
- (39) 前掲、『蒸発人間』、五四—六六頁
- (40) 大岡昇平『文芸時評(下)』(『毎日新聞』一九六七年一〇月三十一日、夕刊)
- (41) 前掲、『安部公房『燃えつきた地図』論』
- (42) 安部公房『私の文学を語る』(『三田文学』一九六八年三月) 一三頁
- (43) 安部公房、大江健三郎『明日を開く文学』(『福島民報』一九八四年一月一日)

昭和二十六年四月二十一日発行 第三〇二五号

# 人質の惨状

86,254人

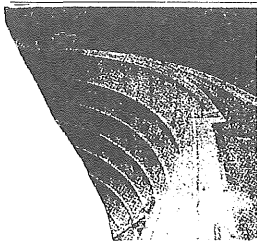
## 各県警に相談所

家出や身元不明の遺体

『室内 全国一斉公開捜索』

凡そに主婦ら80人

法ですわり込み



0日に完工式